

6. 成果報告

<成果報告>

本年度は、1～2年生のプロジェクトの実践が揃ったため、積極的に外部への成果報告を行うことができました。感染症拡大の中、外部からの視察や大規模な報告会を実施することはできませんでしたが、本校ではICTの活用についても実践を進めていたため、大きなホールや体育館など学校内ネットワークを用いた活動や報告が可能になりました。年度末の成果報告では、複数画面を組み合わせてyoutubeLIVEで配信できる環境を整え、学校関係者や保護者だけでなく多くの県外の方々に視聴していただくことができました。生徒の取り組みが充実したことによる発表内容の深化、プレゼンテーションや動画の制作など発信スキルの向上、学校としてのICT環境の充実により、成果報告を充実させることができました。報告した内容をもとに、静岡県内外の先生方や専門家の方々がからのフィードバックも頂き、生徒たちにとって自己肯定感を大きく高める機会となりました。また活動内容についての具体的な実践に関する質問もあり、他校でも取り組んでみたいと思える教材化の可能性を示すことができたと感じました。今後も、取り組みを校内で完結させるのではなく、地域への還元や他校に向けた実践共有の場として広く発信する活動に取り組むと考えています。



▲中継機材のリハーサルの様子



▲ステージを有効に使い成果報告を行うグループ



▲会場は500人級収容できる校内のホールを使用



▲コンソーシアムや運営委員、保護者も多数来場頂いた

<外部での成果報告>

本年度は感染症の拡大にともない、校内に外部からの参加者を招いた大規模な成果報告は自粛せざるを得ない状況でした。そこで、本年度は生徒とともに外部に出向き、小規模な報告会や成果発表を行い、様々な地域で本校の活動を拡散するきっかけとなりました。

①三遠南信交流会



②松坂屋静岡店での成果展示（浜名湖ポスタープロジェクト）



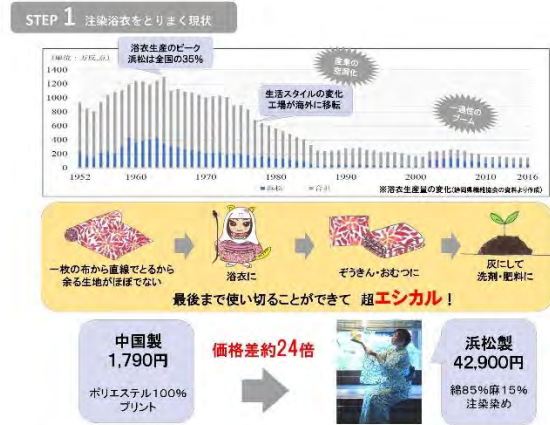
● 展示したポスター（一部抜粋）



③ベネッセ STEAM フェスタ 2022

全国 125 チームの代表 10 校として取り組み成果を発表

これまでの本校での取り組みをまとめ、ベネッセ STEAM フェスタ 2022 にて発表を行いました。自分たちの活動を客観的に捉え直し、どう伝えれば取り組みの魅力が伝わるかプレゼンテーション資料作成に試行錯誤しました。これまで培ってきた取り組みの可視化・プレゼンテーション資料作成技術・発表のスキルを発揮して、全国の様々な学校や外部の方からの評価をいただきました。



STEP 2 カタログポスターの制作

反物では**着姿が想像できない**... 着てみたくなる**ポスター**を制作して販促！

活動ポリシー

- ①知っている場所から行ってみたくなる場所への変化を促す
- ②いつか戻ってきたいと思える街の魅力を発信
- ③中高生には共感を大人にはどこか懐かしさを感じる青春を演出
- ④地元企業や団体と協働

ポスターのこだわり

- 浴衣 (ノスタルジー) × 青春 (友情・恋愛) = 思わず**キュン**とする 幅広い世代に**共感**
- コピーライトは 発言止め・口播体
- SNSで発信 「私にもできるかも」と思わせる仕掛け作り
- 言葉・ロゴの余白を 計算して撮影
- ロゴも生地が デジタル作成

浴衣メーカーの**フォトカタログ**として全国に配布

STEP 2 カタログポスターの制作



STEP 3 生地を身近なものへ加工

①「**紡ぐ・織る・染める・縫う**」**オール浜松**へのこだわり
普段でも着やすいシャツとして **美縫(びより)**を制作！
浜松学芸高校の**夏の準制服**に採用！
1着 6500円 今年は120着を販売！

②着やすさへのこだわり

- 襟の高さ
- 袖の前ふり
- 袖の形
- 胸の立体ダーツ位置
- 裾の補強
- 裾のカーブ

③アイデアを守るこだわり
意匠・商標登録 **済**

STEP 3 生地を身近なものへ加工



STEP 4 ことづくへりへの挑戦

浴衣は花火大会や夏祭りで着るコスプレ衣装に
浴衣を着てでかける・踊るイベント「浴衣De Night」開催！
参加者100人+来場者400人=500人を達成

「浴衣De Night」の3つのART

音楽のART × 浴衣のART × 踊りのART

ARTの力は世代・言語を越えて共感し合える共通のツール
様々な壁を越える可能性を持っている



STEP 5 観光プランの構築

マイクロツーリズム
域内で完結する観光

ARTツーリズム
日本の伝統美を楽しむ観光

「侘び・寂び・粋」をARTとらえ体験し学ぶ観光を域内で完結

浜松のART=注染浴衣

侘び	手作業のため 唯一無二のゆき	「浴衣生産の街」 浴衣を着てみたくなる街 への変化を促す
寂び	色あせて変化する 風合いさえも美しさ	「住んでいる人が好きな街は、 訪れた人も幸せな街」
粋	浴衣が日常の生活に 溶け込む様子	日本の原風景や地場産業を 後世に残す

「染め・仕立て・出かける」を浜松で実現する長期滞在型観光プランをプロデュース

STEP 5 観光プランの構築



STEP 6 CM・企業ポスターの制作

様々な発信活動が地域に認められてPRの依頼が増加！
地元企業の企業ポスターCMを制作！
ARTの力を地域に還元！



STEP 6 CM・企業ポスターの制作

CM動画も制作！



STEP 7 オリジナル商品の開発販売

3つの既存リソースを組み合わせる新しいイノベーション

浴衣の染色技術 浴衣のART × 制服の制作技術 服飾のART × ポスター・制作技術 映像のART



- 型紙の劣化 → 型紙をデジタル化
- 職人の経験に頼る染色 → 印刷用カラーチップを導入
- ブランドイメージを新しく構築 → ブランドポスターを撮影



STEP 7 オリジナル商品の開発販売

いよいよ4種が浜松市公式ECサイトで販売開始



ブランドイメージビジュアル公開！



STEP 8 今後の目標

次はアイドルだ！



MV鋭意制作中！
Coming Soon

7. 他校との協働による実践の教材化への取組

本校の大きな研究テーマには、自校で実施しているプロジェクトの教材フォーマット化があります。本年度は3校との協働を予定していましたが、感染症拡大にともない神奈川県三浦学苑高校との実施のみにとどまりました。特にこれまで2校で実施してきたポスタープロジェクトを協働で実施し、教材としての検証を行いました。これまでの実践を踏まえて、実施手順や方法の標準化に取り組みました。探究的な学びについて実践方法を模索する学校が多く、教材を導入する際の時間的制約や方法の問題に対して、本校のポスタープロジェクトの教材は有効であると感じました。その理由は、実践の方法が確立できていることに加えて、実践内容がコンパクトであり制作する枚数により時間のコントロールが可能である点、何より自分たちの地域の再発見に繋がり地域の方々にも受け入れられるという点でした。通常、地域の学習は総合的な学習の時間で行われることが多く、概ね年間30～50時間が設定されています。様々な行事や活動ですべての時間は確保できないため、短時間かつ時間数を調整できるため導入しやすいフォーマットとなったのではないかと考えています。各校で実践した振り返りにおいても、地域の魅力を再発見できたことや、何気ない日常の風景が特別であることに気づけたといった肯定的なものが多く、教育的効果の高さも確認することができました。この地域のポスター制作プロジェクト型学習は、実施の手順や考え方を整理し、JTBの教育コンテンツとして公開されています。研究終了後も、本校生徒がインフルエンサーとなって様々な地域で実践の拡散に取り組みたいと考えています。

<三浦学苑高校との取組（教材化の検証）>

本年度、神奈川県にある三浦学園高校（私立）と協働して、地域の魅力発進ポスター制作プロジェクトを教材化検証として取り組みました。これまで青森県立鱒ヶ沢高校、三重県立白山高校と協働実践して教材としての検証を進めており、様々な地域で実践できる教材フォーマットとしてだけでなく、活動の中で地域を誇りにおもう気持ちが強くなっていく郷土愛の醸成にも役立っていると感じました。しかし、この2校との協働には、協働に至る前にコンテスト等でお互いの活動について知っている点や生徒数の減少が進む地域の公立高校という共通点があり、それ伊賀の地域で実証した経験がありませんでした。そこで、本年度は本校よりも人口が密集する首都圏の私立高校で、お互いの取り組みについて知らない学校での実証に取り組みました。この協働は、本校が行っている成果報告に三浦学園高校の先生にご参加頂けたことで実現しました。

実際の教材化に向けて、これまでの協働を基に活動手順をフローにして示すことや活動エリアを絞り制作枚数を減らす改善に取り組み、実践を行いました。これまで3日間かけて取り組んできた協働を、事前にSNSやGoogleMapなどのアプリケーションを使用し、お互いに活動する地域の調査内容を共有することで、活動日数を2日に短縮することができました。それでも、活動の中で見つけた何気ない風景に足を止めての撮影も行い、地域の魅力を内側と外側の視点で発掘するという目的は達成することができました。制作活動の後には活動の振り返りを双方で行い、三浦学園の先生方にも成果品を披露しました。活動後、三浦学苑では継続して地域のポスター制作に取り組んで、制作したポスターを市内の商業施設で展示するに至りました。本校のポスター制作プロジェクトを教材化し、それが他校で実践できるフォーマットとなっている事が証明できる実践となりました。



▲両校で市内のフィールドワークを行う



▲生徒も撮影に挑戦



▲コピーライトのコンセプトを決める



▲対話の中でアイデアを可視化して共有する



▲データを確認しながら作業を進める



▲完成したデータを出力して拾う

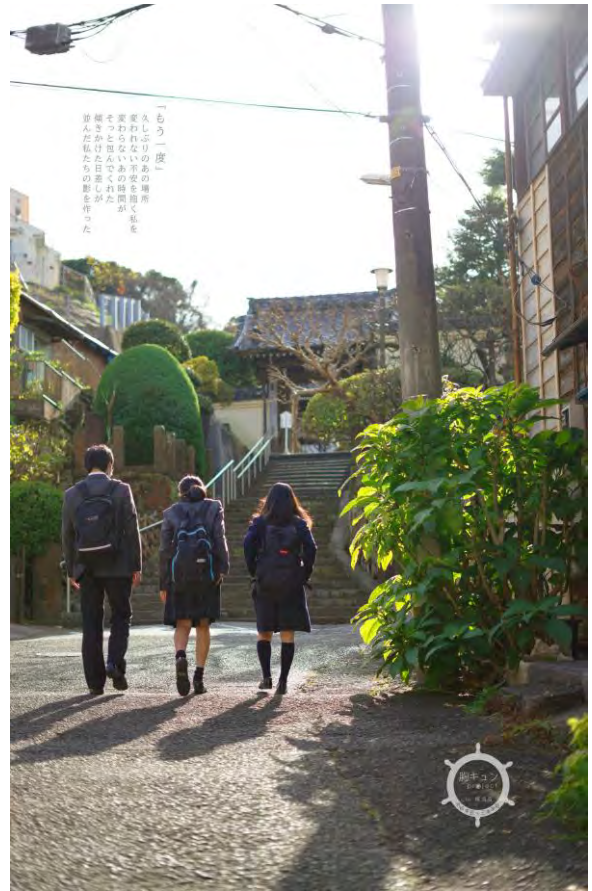


▲完成ポスターの取材を受ける



▲三浦学苑の先生方にも成果を披露する

●制作したポスター



③Artの観点を用いた実践の教材パッケージ活用事例



Artの視点をういた魅力発信活動

地域での学びには先行事例が少ない

地域を見る視点の変化



地域のポスター制作を教材パッケージ化



成功事例を共有化する仕組みづくり



何気ない身近な景色に価値を見出した

8. その他の実践

本校で行ってきたこれまでの地域の魅力発信活動が認められ、地域の企業からの依頼が入るケースが増えてきました。本年度は JTB から協働の打診をいただき、御前崎市でのワーケーションのプロモーションについて活動を行いました。これまではポスターや CM 動画の制作を依頼されるだけでしたが、このプロジェクトではワーケーションのプロモーション企画そのものを提案することができました。地理条件的に不利な御前崎でのワーケーションを親子の絆を取り戻す時間と捉える企画書を作成し、御前崎市と JTB に提案しました。その結果、提案した企画コンセプトを採用いただき、ポスターとプロモーション動画の制作を担当することができました。制作した動画は来年度から正式に公開されます。この御前崎市と JTB との取り組みは、JTB の教育コンテンツとして Web 上で全国に公開されています。

また、浴衣パフォーマンスの実施についても、地域の遊園地やイベントだけでなく、大型ショッピングモールでの単独イベントの依頼など、確実に地域での認知は広まってきました。こうした地域企業からの依頼が増加したことは、クエストエデュケーションで養った企画力とアウトプットのが、実際に地域に還元されている証明であると考えています。

ワーケーション動画制作プラン

浜松学芸高等学校
地域創造コース・社会科学部地域調査班

1. 活動紹介

私たちは自分たちの活動を「胸キュンプロジェクト」と名付け、地域の魅力を発信するポスター制作や動画制作に取り組んでいます。これまでに、天竜浜名湖鉄道や注染浴衣メーカーの自井商事様のカタログポスターなど地元企業のポスターや動画制作に取り組んできました。その他にも、青森県睡ヶ沢高校や三重県白山高校など県外の高校と共同しポスターや動画制作に取り組んでおり、Art の力を用いて地域の魅力を発信する活動を全国に広める取り組みを行っています。



▲天竜浜名湖鉄道公式ポスター



▲浜松盤田信用金庫ポスター



▲地元呉服店のポスター

2. ワケーションについての考え方

私たちは観光甲子園の取り組みを続けており、2019 と 2020 では訪日観光部門で 2 連覇を達成することができました。その活動の中で、観光政策が誘客数を伸ばすことに重点を置きすぎているのではないかと疑問を持ちました。私たちは自分たちの取り組みの中で、誘客から地域に人を引きつける地域引力を高めることが重要だと考えるようになりました。地域引力とは、外部からその地域に関心を持つ・行ってみたいと思える魅力のことであると思っています。プロモーション動画ではなく、そこにいる自分をイメージできるような地域引力を用いた PR も有効ではないかと考えました。

はじめにワーケーションという言葉を知り、具体的なイメージが湧きませんでした。観光やバカンスと仕事を重ねることが具体的な体験としてイメージできませんでした。そこで、地方で仕事をする意味を考え、「都会とは異なる、ゆったりとした時間感覚の中で家族の会話や絆を取り戻す時間を提供する」というコンセプトを考えました。家族で過ごすワーケーションというライフスタイルを提案し、長期滞在型のワーキングスペースとして暮らすように過ごす（泊まる）時間を提供したいと考えました。

▲プロモーション用のポスターと動画のコンセプトを伝えるために企画書を制作し、ワーケーション全体の取組のイメージ共有を図った。提案には動画のストーリーボードを丁寧に作成し、どのようなターゲットに向けた広告活動なのかを明確にした。

3. 提案動画

動画のコンセプトについて、まだ詳細な絵コンテは制作していませんが、全体のストーリーボードは考えてありますのでご提案します。

東京に暮らす出版社勤務の父は、いつも終電で帰るような暮らしをしている。いつも家にいないケセに、私のことには何も知らないの口を出す。私はそんな父が苦手で、最後に父と過ごしたのはいつだったろう…。

高校2年の夏、父は突然私を連れて地方で仕事をすると言い出した。母の夏休みなんだとか。田舎なんて何にもないし友達とも遊べないし、私には億劫な提案にしか思えなかった。仕方なくついでに私の目に映った光景は、想像通り退屈な日々を予感させた。

ワーケーションというらしい、父の思い出の場所らしいが、なぜ父はこんな田舎で仕事したいか私にはわからなかった。それでもこの仕事場から見る朝の海を自慢げに語る父からは、これを私に見せたかったものなのかわかる気がした。それでも、私は「海なんてどこでも同じでしょ」と冷たくあしらうしかできなかった。

父の仕事を見聞するのは初めてだった。何をそんなに遅くまでやるのかわからなかったが、私にはえらく長く感じるこの時間が父にはきっとあっという間に過ぎていくのだろう。あんなにかめつ面して取り組む仕事の何が楽しいのか、家を母に任せきりにしてまでやりたいことなのか私には理解はできなかった。

不器用に作る父の食事。まだ私が小さいころ、休みの日に作る父のご飯は不格好だったが、私の記憶に残っている。学生時代に覚えた得意料理なんだとか。何度も聞いたその昔話を聞きながら、そんな父の記憶がよみがえってきた。あの頃は、父と遊ぶことが楽しみで、父の休みを待ち遠しく思っていた。そんな思いで遠くを見る私に、父がぶっきらぼうに問かける「食わんのか？うまくないか？」。私は「まあまあかな」とそっけなく答えた。

彼の音がなんだか耳について眠れない夜、ふと気づくとまだ父は仕事の PC に向かったままだ。『まだやってるんだ。コーヒーでも飲む？』と不意に声をかけた。いつの間にか眉間に深く刻まれたしわを肌で感じ、ずいぶん老けた印象を与えた。「どうした、寝れないのか？」と声をかけた父に、「なんだか彼の音が気になって…」とマグカップを差し出す。机の上には、私の好きな作家の最新小説のポスターらしきものが映っていた。私は「それって！」と声を出す。父は「お前が好きだって言ってたからな。新しく仕事を受けてみたんだ」とモニターを見つめたまま言う。どんな話なのか、どんな登場人物が好きなのか、父と久しぶりに話をした気がした。

翌日、海を見つめて座ってビールをあげる父。サーファーや若者が多い海には似つかわしくないつかれた中年。私は冷たいボトルをもって隣に座る。驚いたように私を見る父。私は遠くを見つめたまま「仕事してるお父さん、ちょっとかっこよかったよ」と言い放つ。父はぶっきらぼうに「そうか」とだけつぶやく。少しは嬉しそうにすればいいのに。

父と私のワーケーションは、こうしてあっけなく何事もなく過ぎていった。帰りの車窓を眺めながら、「お父さん、今度は私の夢の話も聞いてね」言えるはずのない言葉を飲み込んだ。



▲ポスター撮影の様子
●提案したポスター



▲動画撮影は2日間に及んだ



▲役割を分担して撮影活動が進む



＜高大連携＞

本年度は、より専門的な見地から大学の先生方からも視察の依頼をいただきました。東京女子大学や嵯峨美術大学から来校いただき、次年度以降の高大連携に向けて可能性や実施内容の共有を行うことができました。さらに昨年度から協働に向けて準備をしていた静岡文化芸術大学との協働プロジェクトを実現させ、地域での学びを高大でシームレスに繋げる検証の場を設けることができました。感染症の影響で予定していた内容の全ては実施できませんでしたが、双方の立場からの活動を振り返る成果報告を行い、地元紙に取り上げていただきました。

本年度、大きな挑戦として静岡文化芸術大学との協働プロジェクトを実施しました。静岡文化芸術大学の池上教授の指導のもと、大学生には単位を認定する地域連携演習として「天竜浜名湖鉄道沿線の魅力発進活動」に大学生 11 名と本校生徒 10 名で取り組みました。沿線のフィールドワークを通じて魅力発進の動画とポスターの制作が進んでいましたが、感染症拡大によって活動は中断してしまいました。1 月には大学生・高校生が双方の立場から活動を振り返り、観光の意味や地域の魅力について再考察した成果報告を行いました。高校生にとっては、論理的な思考の形成やプレゼンの構築は大きな刺激になり、大学進学に向けてのキャリア形成としても大きな効果があったと感じました。



▲大学生とともに現地のフィールドワーク



▲コンセプトを基に撮影活動がスタート



▲静岡文化芸術大学での成果報告の様子



▲成果報告はオンラインでメンバーと共有

● 成果報告資料



学芸サイト ポリシーの構築

4つの活動ポリシー

- 知っている場所から行ってみたいくなる場所への変化を促す
- いつか戻ってみたいと思える街の魅力を発信する
- 中高生には共感を、大人にはどこか懐かしさを感じる青春を演出する
- 地元の企業と協働する

活動の継続とともに想いも継続

自分たちの活動がどう受け入れられるのか
大学生との協働で活動に変化が出るのか検証
新しい視点や表現を取り入れたい

高大協働 観光の本質を見つめる機会

活動の停止

感染症の拡大によって活動がストップ

外部からの観光客に頼った乗客は急激な増減の危険性が高い

アフターコロナに向けた可能性

地域観光の持続性とは何かを考える機会



学芸サイト 持続可能性の証明のフェーズへ

活動の拡大

JTB×御前崎市×浜松学芸のワーケーションプロジェクト
地域住民主体の「暮らすように泊まるワーケーション」の実現へ

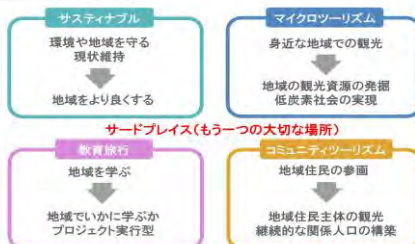


今後の目標

浜名湖イカダプラン 来年度、実現化に向けて観光協会・事業者と協働スタート
デジタルコンテンツの強化 動画制作の継続とヴァーチャル化

教員サイト この先の観光へ

観光で持続可能な地域をつくる



学芸サイト これまでの活動

6年前に始まった天浜線勝手に応援団



高大協働 活動のスタート

フィールドワークと新しい挑戦



成果反映 持続可能な観光へ

サステイナブルな観光とは



教員サイト 観光の教育活動への反映

教育旅行の改革 感染症の拡大によって修学旅行の考え方も変化



● 成果ポスター



上・中: 大学生によるコピーライト制作 下: これまでの手法で制作したポスター



●活動の様子



▲現地プロジェクトとしてフィールドワークを実施



▲気になったところでポスター用の撮影を行う



▲現地で出力し、ポスターを完成させる



▲県庁に訪問して完成報告を行った

9. 今後の課題と展望

本年度は1年生のプロジェクト型学習に加え、2年生のクエストエデュケーションが始まり、それぞれの活動で大きな成果を残すことができました。地域での学びとプロジェクト型学習の相性は良いことが分かったものの、いくつかの課題や改善点も分かってきました。

本年度から始まった2年生のクエストエデュケーションは、地域での系統的な学びの成果を検証する場として最重要と捉えていました。クエストエデュケーションは、1年生の5つのプロジェクトを通じて身につけた、課題に対する実行力と多面的な考察力を発揮する場でした。実際に始めてみると、多くのチームで行き詰まりが見られました。これはこれまでのプロジェクトが短時間でゴールイメージが描きやすかったのに対して、クエストエデュケーションではゴールイメージも生徒達自身で描かなくてはならないことの難しさからであったと分析しています。活動の途中で実行していたプロジェクト自体が中止になってしまい方向転換を余儀なくされたり、協働企業の都合で変更になってしまったりと、民間企業との協働では起こりうる事でした。多くの失敗や困難の中でも、外部コンテストへの参加をゴールイメージとして捉えると、活動自体は進展するようになりました。年度末の成果報告では生徒達がそれぞれの役割を担い、お互いの成果報告の共有を熱心に行っていました。クエストエデュケーションの活動を通じて、1年生のプロジェクト型学習以上に達成感や自己肯定感が高まっているのを感じました。



こうした取り組みを通じで多面的な地域の見方や多様な価値観が形成されるとともに、地域に対しても肯定的な捉え方ができるようになったと強く感じました。その結果、進学希望においても他の普通科生徒よりも県内の大学や地域政策系学部への進学希望の割合が高くなりました。活動の中では、多様な価値観や個性を重視してきました。プロジェクトを実行する中で、自分には何ができるのか、そしてどう地域と関わることができるのか、生徒達がそれぞれ自らを見つめる機会となるキャリア形成の場となっていました。

またプロジェクト型学習をベースとした教育活動の中で、生徒たちがそれぞれ設定した目標や年度末の成果報告に向けて、どのようにそれぞれのプロジェクトを進めていくかは大きな課題でした。生徒たちはどうしても間違えない最短の正解を探してしまう傾向が強く、アイデアの実行やアウトプットの前の話し合いが必要以上に長くなってしまいました。こうした問題を解決するために、クリエイティブな現場で用いられるOODAループを導入することで、実行速度を上げ

ることができました。

PDCA サイクルは、Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Act（改善）の順にサイクルを回しますが、時として改善までたどり着けないケースも見られることに気がつきました。

それに対して、OODA ループは、文字通りループであるため、必要に応じて途中で前の段階に戻ってループから再開したり、状況に応じて任意の段階からループを何度でもリスタートしたりできることが大きな特徴です。Plan（計画）に基づいてゴールに向けてプロジェクトを実行するPDCA サイクルに比べ、OODA ループは自由度が高く、変化に対応しやすいということが大きな違いといえます。つまり、PDCA サイクルでは対応できなかった外的要因による変化を考慮したり、1 ループする前に予想できない変化があれば、引き返して観察し直したり、異なるデータを集めて検討し直したりすることも可能です。失敗してはいけないと思いがちな現代の生徒にとって、こうした試行錯誤やスクラップ&ビルドの機会を設けることでアイデアの実現の可能性が高まりことや、将来的なキャリアに役立つと感じました。

④プロジェクト型学習におけるOODAループの有効性



また、本校のこれまでの実践の多くは、一人のマンパワーに頼った実践であったと言えました。そのため、本年度はプロジェクトの実行者を育成して実行に移すことが大きな目標でした。1年生の5つのプロジェクトについては5名のスタッフがそれぞれ担当し、実践の検証を行うことができました。プロジェクトを校内に完全公開していたため、多くの教員が活動に興味をもち、生徒達への助言や実践への質問などを共有する機会を設けることができました。それにより多面的な地域の見方や多様な価値観を共有するという大きな目標を達成するだけでなく、様々な教科の観点で実践を行うESDの視点を盛り込むことができたと感じています。

管理機関による外部への発信と学外のコンソーシアムメンバーによる地域企業との連携構築は、特に大きな成果に結びつきました。本校でのプロジェクトは、試作をして終わりではなくその事によってどのような変化が起こったり問題を解決したりすることができたか、という点を重視してきました。そのため、協働する企業も単なる技術提供にとどまらず、プロジェクトの成果が実

際に商品化されたり地域に還元されたりする機会創出に繋がりました。これは、年度末の大きな成果報告だけでなく、管理機関によって様々な場で成果を報告する機会を設けていただけたことが大きな要因でした。SNS はもちろん、こまめな情報発信が地域での認知を高め、協働の機会創出に繋がったと感じています。

また、評価についても、外部コンテストを活用することで成果報告と活動評価を同時に行う事ができるという大きなメリットに気づくことができました。アイデアだけに終わらない、商品開発をゴールにしないことで、生徒自身の活動が地域にどのような効果や問題解決に繋がるか、それを検証することをゴールとして取り組んで来ました。その結果、外部コンテストでも大きな評価をいただき、観光甲子園 2021SDG s 修学旅行部門では 2 位となる準グランプリ、高校生 CM コンテストではポスター部門・動画部門の両部門で 1 位となるグランプリ、東京女子大学ビジネスプランニングコンテストではアイデア部門で最優秀となる東京女子大学賞を受賞した他、いくつかのコンテストで入賞に繋がりました。さらに、3 月に行われたベネッセ STEAM フェスタでは、全国 125 チームの中の代表として、全国に向けてプレゼンテーションを行いました。1 年生から系統的に地域で学んできた知識やアイデア構築だけでなく、アイデアの実践結果や新たな企画の構築、アイデアを発信するスキルも向上したことが確認できました。昨年度に続き、2 年連続で本校の想定した定員を上回る生徒が集まり、地域におけるこうした学びのニーズの高さを実感しました。

一番自分が変わったと思うのは、「人前が出るのが嫌ではなくなったこと」だと思います。地創にきて、ほんとに話したことがない人とプロジェクトも進めたり、その結果を報告して、プレゼンを見てくれた人達が「すごい」と笑顔になってくれることが私にとってとても大切なことで、自分も相手に伝えたいと思うようになっていきました。中学生の頃は、人前に出たり、発表することがとても嫌でしたし、初対面の人や先生と話すのも苦手で極力避けてきました。その苦しみ意識が、自分でも分かるほど無くなってきている。と一年を通して感じました。むしろ特進に行っていたら、今も変わっていないかたがたかもしれません。ここに来て、新しい経験もたくさんしたこと、自分の苦手なことが、苦手ではなくなることが自分にとって嬉しいことだし、これが「好き」に変わったこともいいなと思います。

▲1 年生の生徒の振り返りシートより

プロジェクト型学習を通して大きく変化していく様子が確認できる

○1 年生の時は「自分が動画に出たい」「パフォーマンスしたい」という気持ちが強かった。2 年生になるにつれ、文化祭、六、後園、浴衣イベントなど、自分もパフォーマンスをするが、「プロデュースの仕事も多くなるようになった。みんなをまとめたし、曲、振り付けを教える、テーマソングを見栄えを良くする」と、内容についても考える活動をするようになった。調査班の「浴衣アクトの活動」は完全にプロデュースに回った。この経験を通して、クエストの活動でも「プロデュースの活動へと変わっていった。禁煙動画やロックセンターの動画にも自分は出演しているけれど、カメラアングルや、出演者の動きを指示するなどのプロデューサーとしての役割りとした。「出演者」から「プロデュース」という役割りに変化した事が 2 年生になってからの変化と、自分の中の成長だと考える。

▲2 年生の生徒の振り返りシートより

クエストの実行を通して視野が広がり立場が変化していったようすが確認できる。

しかし、実践を標準化していくためには次のような課題が残っていると考えています。

①教員の負担軽減

1年生のプロジェクト型学習では、実施する5つのプロジェクトを5名の教員で分担することで実践の共有と教員の負担を減らすことができました。しかし、2年生のクエストエデュケーションでは生徒がそれぞれ興味の近い者同士でグループを構成したため、6つのチームが同時並行に異なるプロジェクトを実施していました。教材としてフォーマット化を進めていた1年生のプロジェクト型学習に比べて、2年生のクエストエデュケーションは自由度が高く、その分教師の指導分野や範囲も広く深くなりました。外部コンテストへの応募や年度末の成果報告に向けての資料やプレゼンテーションの制作は担当する教員の専門教科の枠を超えており、こうした分野への教師のスキル向上や担当教科との負担調整が今後の課題となります。学校設定科目で「地域創造」を設け、教科としてどう運用していくか、教材としての共有化はもちろんですが、評価・スキルの研修や標準化が改善点として残りました。

②教材化に向けた検証

本校で実施している1～2年生の各プロジェクトは、自校でしか実施することができないプロジェクトとならないように注意してきました。地域の魅力発進ポスタープロジェクトは、これまで青森県や三重県・神奈川県の学校で実践検証を行い、地域を学ぶ教材としてのフォーマット化の達成と有効性を確認できました。さらに、おにぎりプロジェクトや動画のプロジェクトについても、他校での実践の検証段階に入ることができました。ポスタープロジェクトの実践検証が3年かけて取り組んできたように、他のプロジェクトは十分に検証が行えているとは言えません。他校との協働実践を増やし、教材化するための検証に取り組むことが課題となります。また教材化したプロジェクトをどう全国に共有化していくか、その仕組み作りも今後の課題であると考えています。

③進路実現に向けた追跡調査

本年度で地域創造コース1期生は2年生を修了しました。1年生のプロジェクト型学習を踏まえて2年生のクエストエデュケーションに取り組み、地域での学びに系統的に取り組むことができました。しかし研究指定期間で卒業生を送り出してはいたため、進路の追跡調査をしていくことが今後の課題となります。科目として実践するために先行実施していた部活動の「社会科学部地域調査班」では、所属する3年生は7名のうち半数以上の4名が地域や政策に関わる学部へ進学することが決まりました。4名の生徒は活動の実績をもとに総合選抜型や学校推薦入試に挑戦し、学部学科は異なるものの全て合格に結びつきました。この指導のノウハウを活かし、地域創造コースの1期生45名の進路実現をどう指導していくか、次年度以降の大きな課題であると考えています。

研究指定の期間を通じて、「地域企業と協働する→外部へ発信する→企業からの依頼が増加する」というサイクルが回ることでこれまで以上に地域との協働が進み、地域に開かれた学校、そして地域に必要とされる学校として認知されてきたと感じています。地域と学校、そして企業や行政と連携した新しい学びの場を創出するという本校の目的は、新しい学力観とも一致します。次年度以降、継続に向けた調整を続けていきたいと考えています。

<新聞掲載>



華やか注染そめ 5柄の浴衣制作

浜松学芸高と白井商事

きょうファッションショー

浴衣の企画製造、卸の白井商事（浜松市南区）は、浜松学芸高（中区）デザイン科の生徒がデザインした注染そめの新作浴衣「輪-rin」を制作した。若い感性と斬新な発想を反映し、半年間かけて完成させた5柄のシリーズ。15日に生徒たちがファッションショーとして披露し、コロナ禍で着用機会などが激減した厳しい状況に負けないよう、伝統の浴衣と地場産業の魅力を発信する。

「注染そめの産地浜松から、世界を応援する」といったテーマを基に、3年の河原崎真央さんが5枚1組で考案した図柄を採用した。河原崎さん自身がプロのデザイナーらからデザインの改良を重ね、白井商事が2月までに仕上げた。生地は今後の日程発表する予定で、アロハシャツなどにアレンジした数種類の試作も用意した。

同社の白井成治専務取締役（54）は「直接携わり、地元産業に誇りを感じてほしいかった。経験を進路検討にも生かしてくれたらうれしい」と期待する。

披露は15日午前10時～午後4時、中区の起業支援施設「FUSE（フーズ）」で、白井専務が4年前から同高と取り組むフォトブック製作などの浜松注染の研究成果も展示発表し、午後1時半からはファッションショーをDTC。

（浜松局・萩島浩太）

浜松学芸高の生徒がデザインした浜松注染の浴衣「輪-rin」が並ぶ会場＝浜松市中区のFUSE

▲静岡新聞(2021年5月15日)

「世界を応援」新作浴衣

注染そめ 浜松学芸高生が披露

浴衣の企画製造、卸メーカと浜松学芸高（同市中区）白井商事（浜松市南区）の生徒がコラボして制作した注染そめの新作浴衣「輪-rin」の発表会が十五日、中区の起業支援拠点「FUSE（フーズ）」であった。注染職人、デザイナーらによるキャリアリトークや、同校生徒による成果発表とファッションショーも開催された。

「注染ゆかたの産地浜松から、世界を応援するゆかた」をテーマに、同社の白井成治専務取締役（54）が同校の生徒にデザイン案を昨年十月に依頼した。二十ほどの図案が集まり、デザイナー専攻三年の河原崎真央さん（17）が警田市の図案が採用された五柄の浴衣は、五輪色を取り入れ、世界を応援する意味を持つという。白井さんは「注染を染める際、河原崎さんの図案は新しい挑戦になると思い、選んだ。若い感性により、今までの浴衣にはない配色に仕上がった」と話した。

河原崎さんは「人と人とのつながりである『輪』を意識し、曲線を多く使用した。一番のお気に入りには黒色の柄」と話す。

考案した作品を基にグラフィックデザイナーが改良を重ね、二橋染工場（中区）が染色を担当した。制作した生地は、反物として「ファッションきものいしばし」（同）で販売する予定。

（山本真暉）

ファッションショーでポーズをとる浜松学芸高の生徒＝浜松市中区のFUSEで

▲中日新聞(2021年5月16日)



アオハル隊の認定を受けた生徒ら＝浜松市役所

浜松学芸中高と天竜高二俣 アオハル隊認定で抱負

浜松市は3日、浜松魅力の掘り起こしに向
学芸中高(中区)の社、気持ち新たに
会科学部地域調査班と。天竜高は浜松学院大
地域創造コース、天竜 市役所の認定式で、
高二校舎の生徒でつ 奥家章夫市民部長が浜
高「T・C・C(テ 松学芸中高の戸塚芳真
ンリニウ・カルチャー さん(高校2年)と、
・コボレーション) 天竜高2年の高柳由衣
を、地域の魅力発信な さんに認定証を手渡
どに取り組み「青春は、 「若い力で活発に
まます応援隊(アオハ 活動してほしい」と激
ル隊)」に認定した。 励した。浜松学芸中高
2団体の生徒は地元のは4回目、天竜高は3
回目に認定となった。

浜松学芸中高は、連
州弁を使った観光ポス
ター制作に力を入れ
る。2月に行われた観
光動画の出来栄を頭
う観光甲子園の訪日観
光部門で2連覇を達成
した。
(浜松橋岡・白木俊樹)

▲静岡新聞(2021年6月4日)

浜松で17、18日 県繊維協会は17、18 の両日、「注染・ゆか たコレクション」を浜 松市中区の浜松科学館 と同区のポップアップ スペース「はままちブ ラス」で開く。

浜松科学館では両日
午後「浜松注染そめ」
の無料美演・体験会を
開き、17日午後4時に
は浜松学芸高生が注染
そめの浴衣ファッション
ショーを行う。

はままちプラスでは
両日午前10時～午後5
時、注染そめの手ぬぐ
いや浴衣、和装小物な
どの製品を販売する。
同協会は県内からの
来場を呼び掛ける。問
い合わせは同協会入電
053(456)72
22<>へ。

▲静岡新聞(2021年7月13日)

注染そめ浴衣の魅力発信



ダンスを交えて浴衣をPRする高校生＝浜松市中区の浜松科学館

中区 きょうまで

浜松学芸高生 ダンス交えショー

浜松科学館では浴衣のファッションショーを行い、浜松学芸高の生徒約40人が注染そめで仕上げた確かな柄の浴衣を披露した。生徒らは「じみやほかじが特徴。職人さんが一つ一つ作りし、配色が全て異なる」と来場者に魅力を伝えた。

体験会には市民約30人が参加し、型枠を当てた生地専用のやかんで染料を流し込む工程を学んだ。

はままちプラスでは地元事業者が、注染そめの浴衣や和装小物な

浜松伝統の織物の染色技法「注染そめ」を紹介するイベント「注染・ゆかたコレクション」が17日、浜松市中区の浜松科学館と地域発信拠点のはままちプラスの2会場で始まった。18日まで。

どの製品を販売した。昨年に続いて企画し、展示の販売は午前10時～午後5時。同日は、異議なく、18日は注染そめ体験会を午後1時半から3時、はままちプラスにて開催する。

▲静岡新聞(2021年7月18日)

浜名湖の魅力ポスターで紹介する浜松学芸高生が、浜松学芸高社会科学研究部地域調査班の生徒による浜名湖の魅力発信するポスター展が28日まで、静岡市葵区の松坂屋静岡店で開かれている。湖周辺のどこか懐かしさを感じる風景を写真に収め、ポスターに仕上げた18作品が飾られている。



浜松学芸高の生徒による浜名湖の魅力を発信するポスターが飾られた会場＝静岡市葵区の松坂屋静岡店

「新型コロナウイルスの収束後にぜひ訪れてほしい」と思いを込め、昨年度から写真に面した無人駅からの眺めや湖と桜の木の共演、夕焼けや夜の景色など日常の風景の魅力伝えることになったという。

制服の生徒や浴衣の卒業生も登場し、作品に「友情」や「恋愛」などのテーマも持たせている。

同班の相曾千鶴さん

「17日は「高校生目線で浜名湖の魅力表現している。見る人が青春を感じたり、思い出したりしてくれたら」と来場を呼び掛ける。

▲静岡新聞(2021年9月17日)



▲中日新聞(2021年10月20日)



▲静岡新聞(2021年10月24日)



▲静岡新聞(2021年12月11日)

浜松学芸高 2部門で最高賞



高校生CMコン・映像とポスター

十一月に開催された「第十六回高校生CMコンテスト2021」（福山人間文化学部メディア・映像学科主催）で、映像とポスター部門それぞれグランプリを獲得した浜松学芸高校（浜松市中区）の生徒たちが市役所を訪れ、鈴木康友市長に授賞を報告した。（佐藤裕介）

天浜線の魅力PR 市長に喜び報告

グランプリを獲得した作品と
浜松学芸高生（浜松市役所で）

生徒は地域創造コース二年の五人。映像の部では、帰省した際に天竜浜名湖鉄道の駅で、高校時代の淡い恋愛を振り返る女性を描いた「恋する天浜線」。ポスターの部では、浜名湖沿いの桜の木の下に立つ男子・女子生徒の姿を切り取った「サクラサク」がそれぞれグランプリを受賞した。

訪問は八日であり、リーダーを務めた横村美優さん（じは「どういふ角度からどう撮るのが、寒い中で立ち方を確認するが天変だった。地域の魅力を発信する活動に取り組んでいることを、できるだけ多くの方々に知ってほしい」と笑顔を見せた。

▲中日新聞(2021年12月14日)

浜松学芸高生が森町訪問

地域PR動画で最優秀報告



太田町長（右端）への受賞報告に訪れた生徒＝森町役場

昨年11月の「高校生CMコンテスト2021」で、森町の遠江一宮駅を舞台に撮影したPR動画で映像部門グランプリに輝いた浜松学芸高（浜松市中区）地域創造コースの生徒がそのほか、町役場を訪問し、太田康雄町長に受賞報告した。

訪れたのは2年の横村のポスターを制作する村美優さん、セイヤルPR活動に取り組んだ桜さん、山本真奈さん、戸塚巧真さん、島山摩画制作にも挑戦し、活知さん。同コースの生動の一環として同コンテストに参加した。

5人は浜松市在住の作家いぬいゆんさんの協力を得て「中学生には共感を得、大人にはどこが懐かしさを感じる青春をテーマに制作。大学生が久しぶりに地元に戻り、同駅で高校時代の淡い恋愛を思い出す」との物語になっている。

リーダーの横村さんは「天浜線の魅力を知ってほしい」との思いを込めた」と話し、太田町長は「地元の人には見落としやすい視点で森町を捉えている。新しい中にも懐かしさを感じる動画を作っていたといい」とたたえた。

（森井支高・仲瀬駿介）

▲静岡新聞(2022年1月27日)

若者目線 新鮮に

青春と自由のせ天浜線ポスター



完成したポスターを披露する高校生と大学生＝静岡文化芸術大

浜松市中区の浜松学芸高校の生徒と静岡文化芸術大の学生が、天竜区朝霧町の魅力を発信しようと力を合わせ、ポスターを制作した。時代を越えて存在し続ける鉄道と、次の世代へと委ねる利用者の対比を捉えたテーマは「懐かしさと新しさ」。写真撮影からキャッチコピーの考案まで、大学生と高校生それぞれが目線を変えながら作り上げた。

（岸友里）

ポスターは3種類あり、駅舎や踏切前に立つ学生、駅のホームで電車を待つ若者たちの姿を捉えた写真並列に印刷した。2天浜線に乗って懐かしさと新しさに会いに行け、「あの頃の忘れ物を懐かしに束ねた」「白い線路の駅舎、ぼんやりと木々の影、トランの待合室、踏切の駅舎、残っています」といったキャッチコピーを載せた。制作したのは学芸大の九人、文化芸大の一人。学芸大では徒有志づくる天竜線跡地に駅舎を

撮影からキャッチコピーまで

が、全票を紹介するポスターを制作するなどの活動を続けており、二〇二二年度は文化芸大が加わった。昨年四月から始まった活動では、駅でのロケなどで協力してきた。「青春を過ごす高校生と、大学の一日を振り返る若い世代、一対一で話を聞いた。コロナ禍で昨夏以降は活動を休止せざるを得なくなり、当初予定していたPR活動の作成は断念した。一日二日に文化芸大であった成果報告会で、ポスターをお披露目。高校一年の山本真奈さん（こは）は「高校生にも大人にも共感してもらえるポスターを目指した。私では思いつかない言葉を、大学生が考案してくれた。新しい視点が入って面白いものができた」と紹介した。

活動の振り返るた本学生一年生の風岡ひなさん（ふう）は「鉄道の不変性と新しい世代の対比をテーマとして提案した。高校生が柔軟な想像で受け入れてくれた」と話した。高校生から「キャッチコピー（コピー）を考案したい」との質問に対し、「上野樹子さん（の）は「誰かがかきやうい言葉を心掛けてくれる。対象から得た印象の類語を探せばいいから」とも

▲中日新聞(2022年2月2日)

浜松学芸高が 準グランプリ

観光甲子園

高校生が観光地の魅力や課題を三分間の動画にまとめて成果を競う「観光甲子園2021」の決勝大会が6日、神戸市で開かれた。地元の遺産を紹介する「日本遺産部門」で兵庫県丹波篠山市の県立篠山鳳鳴高がグランプリに輝いた。国連の持続可能な開発目標（SDGs）を取り入れた修学旅行プランを提案する「SDGs修学旅行部門」では高知県幡豆町の県立幡豆高がグランプリとなった。

篠山鳳鳴高は江戸時代から歌い継がれる伝統民謡「デカンショ節」を紹介。観光イベントやセミナーを企画する団体「NEXT TOURISM」（神戸市）が主催。全国から応募があった四百二十六チームのうち十校十チームが決勝に進出した。新型コロナウイルス感染症拡大を受け、高松市はインターネットライブで参加した。

篠山鳳鳴高は人口減少が課題となる中、鍛冶や稲作り体験を企画した。観光イベントやセミナーを企画する団体「NEXT TOURISM」（神戸市）が主催。全国から応募があった426チームのうち10校10チームが決勝に進出した。新型コロナウイルス感染症拡大を受け、高松市はインターネットライブで参加した。

▲中日新聞(2022年2月7日)

浜松学芸高 準グランプリ

観光甲子園

高校生が観光地の魅力や課題を三分間の動画にまとめて成果を競う「観光甲子園2021」の決勝大会が6日、神戸市で開かれた。地元を遺産を紹介する「日本遺産部門」で兵庫県丹波篠山市の県立篠山鳳鳴高が

グランプリに輝いた。国連の持続可能な開発目標（SDGs）を取り入れた修学旅行プランを提案する「SDGs修学旅行部門」では高知県幡豆町の県立幡豆高がグランプリ、浜松学芸高が準グランプリとなった。

篠山鳳鳴高は江戸時代から歌い継がれる伝統民謡「デカンショ節」を紹介。観光イベントやセミナーを企画する団体「NEXT TOURISM」（神戸市）が主催。全国から応募があった426チームのうち10校10チームが決勝に進出した。新型コロナウイルス感染症拡大を受け、高松市はインターネットライブで参加した。

▲静岡新聞(2022年2月7日)

<テレビ放送>



▲NHK たっぷり静岡(2021年6月16日)



▲SBS テレビ 元気!しずおか人(2021年8月7日)



浜松学芸高等学校
社会科学地域調査班 山田 祐未佳さん

▲NHK-BS 鉄道ポスターの旅

大切な地域との「つながり」。一人ひとりのこれから始める一歩を応援する特集号です。



Vivere

11/11 特集号 Vol.770

発行所：静岡新聞社 発行部局：静岡支社 発行日：毎月第3日または第4日(毎月1日) 発行部局：〒420-0000 発行部局：〒420-0000 発行部局：〒420-0000

新しい「つながり」が地域の未来をつくる。

人と離れることを強いられたコロナ禍で、改めて大切なものに気付いた。人や地域とつながることが持つ力。今だからこそ踏み出せる確かな一歩がある。



巻頭：高校生が見つね、発信する、地域の宝。浜松学芸高校～普通科 地域創造コース～

写真：浜松市の観光協会が制作している浜松学芸高校の生徒らと、一緒に活動する観光協会オンライン会の人たちと連携した動画もこちらにチェック。



高校生が見つね、発信する、地域の宝。

地域の魅力発信活動を教材化した、浜松学芸高校・地域創造コース。地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。

写真：浜松市の観光協会。左にはひふれ25th。右は観光協会が制作する「浜松学芸高校のつながり」。



浜松湖プロジェクトで取り組む高校生。左から右へ、地域創造コースの生徒らと、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。

浜名湖プロジェクトで再発見

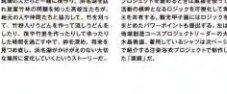
浜名湖の魅力を発信する活動が、浜松学芸高校の生徒らと、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。その活動は、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。



浜名湖プロジェクトで取り組む高校生。左から右へ、地域創造コースの生徒らと、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。

域外の活動からコース設立へ

浜松学芸高校の活動は、地域創造コースの生徒らと、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。その活動は、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。



浜名湖プロジェクトで取り組む高校生。左から右へ、地域創造コースの生徒らと、地元のプロフェッショナルと協働しながら、高校発のイノベーションを目指す。



地域産業の注染でシャツ作り

地域産業の注染でシャツ作り。地域産業の注染でシャツ作り。地域産業の注染でシャツ作り。地域産業の注染でシャツ作り。



アイデアを形にする力、Art

アイデアを形にする力、Art。アイデアを形にする力、Art。アイデアを形にする力、Art。アイデアを形にする力、Art。



高学舎施設でミニコンサート

高学舎施設でミニコンサート。高学舎施設でミニコンサート。高学舎施設でミニコンサート。高学舎施設でミニコンサート。



「地域人財」を育てる学校へ

「地域人財」を育てる学校へ。地域人財を育てる学校へ。地域人財を育てる学校へ。地域人財を育てる学校へ。

▼JTB Web マガジンに掲載

高校生が作る地域PR動画！探究活動の成果に自治体や企業も注目！！～浜松学芸高等学校～

2022.02.09

国内プログラム

海外プログラム

学校運営支援

履修見直し・新学力育成

リーダーシップ育成

チームワーク・協働力育成

#リーダーシップ #SDGs #探究学習 #カリキュラムマネジメント

静岡県にある浜松学芸高等学校は、普通科のなかに地域創造コースを設置し、地域探究に力を注いでいます。1年次には5つのプロジェクトを経験し、2年次には自ら課題を設定し成果報告までつなげる活動へと発展。自治体などからオファーを受けて、生徒が地域のプロモーションアイデアを考え、動画やポスターを制作する姿はまるで一つの企業のようなようです。多数ある取り組みの中から今回は、「御前崎市ワーケーション推進プロジェクト」に焦点を当ててお届けします。



学校プロフィール

学校法人信愛学園 浜松学芸中学校・高等学校

1902年に浜松裁縫女学校として開校。1996年に浜松学芸高等学校に改称し男女共学となる。普通科特進コース・地域創造コース・科学創造コースと芸術科音楽コース・美術コース・書道コースを有する。

- ・ 文部科学省指定事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」指定校（2019～）

所在地 静岡県浜松市中区下池川町34番3号

学校HP <https://www.gakugei.ed.jp/> 



地域から必要とされる学校を目指して探究活動をスタート

浜松学芸高校は、2016年に地域での探究活動をスタートさせ、観光動画コンテスト「観光甲子園」で2年連続グランプリを受賞するなど、近年輝かしい実績を残している学校です。地域創造コースの大木島詳弘先生は、学校の存在価値を考えて活動を開始したと語ります。



地域創造コース担当 大木島詳弘先生。
地域創造コースの生徒たちが作成した「制服」を着用

「静岡県では公立高校が優勢で、私立高校には併願で入学する生徒が多いという実態があります。本校も同様の状況が続いていました。地域に必要とされ、選ばれる学校であるためには、学びを学校で閉じてはいけません。地域と一緒に、地域の役に立てる学校のあり方はないか。そんな思いから地域における探究活動をスタートさせました」

最初に取り組んだのは天竜浜名湖鉄道のPR。たった5人の夏休みの集中講座からはじまった取り組みは、やがて部活動になり、2020年からはついにコースとして設置されました。活動にはアート的手法を取り入れ、動画やポスターを使ったアウトプットに積極的に取り組んでいます。地域創造コースでは、学校設定科目として週4時間の「地域創造概論」（2時間）と「地域創造演習」（2時間）が設けられているほか、放課後には同コースから有志の生徒が探究部活動として活動。現在は42事業ほどが動いているといいます。

天竜浜名湖鉄道PRポスター



殺到するオファーを引き受けるかどうかは生徒が判断

多数ある活動の中から、本記事では2021年から始まった「御前崎市ワーケーション推進プロジェクト」についてご紹介します。プロジェクトのきっかけは、御前崎市の事業を受託したJTBからオファーがあったこと。最初の段階では生徒たちは受託するか悩んでいたといいます。

「これまで生徒たちは、学校や自宅などがある地域の魅力を発信することを大事にしてきました。オファーのあった御前崎市から本校へ来ている生徒は学年で数人ほど。まずはフィールドワークに行き、『自分達の地域』として捉えられるのかを検討することになりました」

同校にはたくさんのプロジェクトの依頼がひっきりなしに寄せられます。それを受託するかどうかは全て生徒たちが判断します。判断基準は、生徒自身が決めた4つの活動ポリシーを達成できるプロジェクトであること。

4つの活動ポリシー

- 1 知っている場所から行ってみたいくなる場所への変化を促す
- 2 中高生には共感を、大人には懐かしさを感じる青春を演出する
- 3 いつか戻ってきたいと思える場所にする
- 4 地元の企業・組織と協働する

御前崎市をフィールドワークした結果、「これまでになかったことだからこそ、やってみよう」と盛り上がり、プロジェクトがスタートしました。

企画、撮影、編集、その後までとことんこだわり抜く

本プロジェクトに中心的に関わっているのは5名。(動画撮影にはさらに多くの生徒が関わりました。)御前崎市との打ち合わせ段階で提案した企画書には、ワーケーション推進のコンセプトを下記のように示しました。

誘客から地域に人を引きつける地域引力を高めることが重要だと考えるようになりました。地域引力とは、外部からその地域に関心を持つ・行ってみたいと思える魅力のことであると思っています。(中略)そこにいる自分をイメージできるような地域引力を用いたPRも有効ではないかと考えました。

地方で仕事をする意味を考え、「都会とは異なる、ゆったりとした時間感覚の中で家族の会話や絆を取り戻す時間を提供する」というコンセプトを考えました。家族で過ごすワーケーションというライフスタイルを提案し、長期滞在型のワーキングスペースとして暮らすように過ごす(泊まる)時間を提供したいと考えました。



撮影では軽トラックがある場所を探し回ったり、モデルの生徒の姿勢を支えるために裏方の生徒が支えたことも



撮影した動画をもとに、御前崎市に提案するティザー広告(注)のストーリーを練る生徒たちと大木島先生

※ティザー広告：商品の要素の一部をあえて隠すことによって消費者の注目を集めるプロモーション手法

企画が通った後は、ストーリーボードを作成し、どういった風景で物語を展開していくか、どこで撮影するか、服装をどうするかなど幾度も話し合いを重ねました。話し合いを重ねる中で、「家族でワーケーション」の物語を具体化していきました。入念に準備を重ねた上で、動画と写真の撮影をスタート。フィールド調査や下見を何度も重ねて作られたプロモーション動画をご覧ください。

御前崎市ワーケーション推進プロジェクトPR動画



動画作成後に生徒が目にしたのは、御前崎市にはワーケーションで訪れる家族のための移動交通手段が少ないこと。検討の結果、ゴルフ場で使われていないゴルフカートをマイクロモビリティとして活用するアイデアが生まれ、現在市に提案を行う計画も進んでいます。一つの作品を作り上げることで「おわり」ではなく、生徒が探究を発展させ続けていくことが同校のプロジェクトの特徴の一つです。

教員がゴールを設定しないことで、生徒が主体的に動き出す

「御前崎市ワーケーション推進プロジェクト」同様、それぞれのプロジェクトは生徒によって発展を続けています。大木島先生は、「教員がゴールに向かって生徒の手を引っ張るのではなく、ミスをしていいから、納得するまでOODAループ(ウーダーループ/Observe(観察)、Orient(仮説、状況判断)、Decide(意思決定)、Action(実行))を回転させることが重要だと考えています」と言います。

「教員は生徒のプロジェクトを見守り、活動の熱量を増幅させるジェネレーターです。最初は私も生徒たちを待つことに苦労しました。大人の顔色を見て進めるプロジェクトは探究ではありません。生徒たちは自分で考え自分で動けるようになっていきます。」



「御前崎市ワーケーション推進プロジェクト」メンバーの5人

こうした活動は着実に生徒たちの力となっています。「御前崎市ワーケーション推進プロジェクト」のリーダーである2年生のセライヤ桜さんはこう語ります。

「高校に入り、自分は話し合いを経てみんなで一つのものを作り上げていくことが好きなのだと気づきました。現在は、はやく働きたいと思っているんです。会社で意見を出し合っ、みんなでプロジェクトを作り上げる。2年間で経験したこのおもしろさをずっと続けていきたいと考えています」

同じくワーケーションプロジェクトのメンバーである山本果奈さんはこう展望を語ります。

「地域探究活動が楽しくて、自分にも合っていると感じることができました。探究をすることでこれまで住んでいた浜松市にこんな魅力があるのだと気づくことができました。地域のことを知る楽しさに病みつきになっています。ただ、今はこの目の前の地域にしか関わることができていないので、もっと他の地域のことも知りたいたいと感じています。そこで、卒業後は観光を学べる大学に進みたいと考えています」

地方に若者を呼び戻すサステナブルなサイクルをつくる

来年度には、地域探究活動の一期生が同校に教員として戻ってくるといいます。大木島先生はこれこそが「一番の成果」だと語ります。

「教員として戻ってくる彼は、最初は地域の活動にそこまで積極的ではなかったんです。しかし、関わっていくうちに考え方が変わり、大学では『地域で学ぶ際には何が大事なのか』について研究しています。彼は世の中をよくしていくために、教育の実践者になっていくという道を選んだと語っていました。彼のように地方にUターンする者は多くはありません。しかし、これまで5人中5人が首都圏に出たままになっていたものが、5人のうち1人でも戻ってくれば地域は変容していきます。私たちのできることはすごく小さいことかもしれませんが、地域の魅力を知る機会を創出し、小さくてもサイクルを回していくことが地方部では大切だと考えています」

現在では、地域創造コースの活動は学校外の多くの人が知るものとなり、このコースを希望する生徒が入学定員をオーバーするほどの人気となっています。生徒の探究的な学びと進路の実現、そして地域の未来を見据えた学校のあり方を考えるヒントが詰まった同校の取り組みから、これからも目が離せません。

ホワイトペーパー（お役立ち資料）

【図解】学校事例レポート～浜松学芸高校の取り組みに学ぶ～ 探究で地域から必要とされる学校になるための7つのヒント

浜松学芸高校は、なぜ地域探究活動を始めてから短期間のうちに全国コンテストでグランプリを受賞し、自治体や企業からプロモーション動画制作を依頼されるほどの活動に発展させることができたのでしょうか？ホワイトペーパーでは、その秘密を様々な角度からひも解いていきます。巻末には同校の事例をもとに明日からの地域探究実践に役立つヒントもまとめました。ぜひ一読ください。

